

國學院大學學術情報リポジトリ

抗戦期の中国文学に見る「日本人八路軍」像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 日本人八路軍, 河内一郎, 大地龍蛇, 梅子姑娘 キーワード (En): 作成者: 張, 競文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000073

抗戦期の中国文学に見る「日本人八路軍」像

The Image of “the Japanese Soldiers of the Eighth Route Army” in Chinese Literature During the Anti-Japanese War

張 競 文

キーワード：日本人八路軍 河内一郎 大地龍蛇 梅子姑娘

Key Words: the Japanese Soldiers of the Eighth Route Army Henei Yilang Dadi longshe Meizi guniang

要旨

抗日戦争期の中国文学における日本人像と言えば、「鬼子」のイメージが圧倒的に多く描かれている。近年、異色の日本人像として研究の視野に入った「日本人八路軍」は、先行研究ではよく反戦日本人や日本人捕虜として扱われ、中国軍に入ったという特徴はあまり注目されていない。そして、詳細なテキスト分析や各人物像形成の要因分析も研究の余地が残っている。

本稿は丁玲の戯曲『河内一郎』、老舍の戯曲『大地龍蛇』、謝冰瑩の中編『梅子姑娘』を取り上げ、河内一郎や馬志遠など四人の「日本人八路軍」像を分析した。その上、人物像を比較しながら、それぞれの形成要因を探り、イメージの形成と時代背景、創作目的、作家の経歴や思想との関係を明らかにした。

「日本人八路軍」像はイデオロギー的な要素と密接に関わり、時代に応じて作られたと言える。類型化された日本人像を多様化させると同時に、正義は必ず悪に勝つという壮大な「主旋律」を強化したものである。

Abstract

In all the images of Japanese in Chinese literature during the Anti-Japanese War, the image of “Guizi” occupies the majority. Recently, as a unique image of Japanese, “the Japanese Soldiers of the Eighth Route Army” has attracted the attention of researchers. In previous studies, “the Japanese Soldiers of the Eighth Route Army” were often treated as anti-war Japanese or Japanese prisoners of war, and little attention has been paid to the character of joining the Chinese army. In addition, detailed textual analysis and cause analysis of each character’s image formation still leave room for research.

This paper took up Ding Ling’s play “Henei Yilang”, Lao She’s play “Dadi longshe”, and Xie Bingying’s novella “Meizi guniang”, grasped the images of four “Japanese Soldiers of the Eighth Route Army”, including Ichiro Kawauchi, Ma Zhiyuan, etc. On this basis, this paper compared the characters and tried to seek the factors of each character’s image formation, and revealed the relationship between the image formation and the historical background, the

creative aim, and the writer's experience and thought.

It can be said that the image of “the Japanese Soldiers of the Eighth Route Army” is closely related to ideology and born in response to the needs of age. It diversified the stereotyped Japanese image and strengthened the grand theme that justice triumphs over evil.

一、はじめに

(一) 問題提起

抗日戦争期の中国文学を研究する際、日本人像は無視されるべきではない。「鬼子」のイメージが圧倒的に多く描かれているが、異色の日本人像として、「日本人八路軍」も研究の視野に入った。

近年、人間性の高い日本人像への関心の高まりにつれ、抗日戦争期の文学における「日本人八路軍」像は研究者の注目を受けた。張韶聞 (2012) ⁽¹⁾ は抗日戦争期のルポタージュ、小説と劇曲を研究し、「日本人八路軍」像を日本人捕虜像の一部として、「感化教育の改造者」と「平和への追求者」という二種類があると示唆した。その上、「他者」と「自分」の視点から総体的に日本人捕虜像の形成要因を探った。

紙幅の関係上、本稿では当時中国大陆の作家が書いたフィクション作品のみに焦点を当てる。調べた結果、「日本人八路軍」に関する作品は丁玲の劇曲『河内一郎』(1938)、老舍の劇曲『大地龍蛇』(1941)、謝冰瑩の中編『梅子姑娘』(1941)と冷波の劇曲『梅子姑娘』(1941)がある。冷波の劇曲『梅子姑娘』は謝冰瑩の同名小説を脚本化したものであるため、今回は原作に基づいて分析する。したがって、本稿は『河内一郎』、『大地龍蛇』と小説の『梅子姑娘』という三作を研究対象とする。

この三作における「日本人八路軍」像について、張韶聞 (2012) ⁽²⁾ は『河内一郎』の河内は「感化教育の改造者」で、『大地龍蛇』の馬志遠と『梅子姑娘』の中條は「平和への追求者」であると指摘した。靳明全と金安利 (2010) ⁽³⁾ は河内の家族思いや善良な心などを論じた。王学振 (2012) は ⁽⁴⁾ 『梅子姑娘』の梅子が日本軍に騙

(1) 張韶聞. 中国抗戦文学中的日本戦俘形象. 重慶師範大学, 2012.

(2) 張韶聞. 中国抗戦文学中的日本戦俘形象. 重慶師範大学, 2012.

(3) 靳明全, 金安利. 論抗戦文学中的日本軍人形象類型. 漢語言文学研究, 2010年02期.

(4) 王学振. 抗戦文学中的慰安婦題材. 南京師範大学文学院学报, 2012年04期.

された者であると述べ、金安利 (2019) ⁽⁵⁾ は梅子が反戦の勇気を持っている女性であると論じた。全体的に言えば、抗戦期の中国文学における「日本人八路軍」のイメージを取り上げ、詳しいテキスト分析や各人物をめぐるイメージの形成要因を研究する余地が残っている。

本稿は先行研究を踏まえた上で、テキスト分析を通して、『河内一郎』、『大地龍蛇』と『梅子姑娘』における各「日本人八路軍」像に対する分析をさらに広い視点から進めていく。その上、各人物像を比較しながら、イメージ形成に影響を与える要因を探り、人物像を全面的に把握していきたい。

(二)「日本人八路軍」

中国民間では、「日本人八路軍」⁽⁶⁾ は意味の広い言葉として、抗日戦争中に中国軍⁽⁷⁾ に入隊した日本人や解放戦争中に共産党軍に入隊した日本人に使われている。この呼び方は『人民日報』『北京日報』『文史月刊』などの新聞や雑誌の記事に散見される。小林清の回想録『在中国的土地上 一個“日本八路”的自述』のように、反戦日本人がそう名乗っていることもある。

学界では、統一された定義が見られない。例えば、張煥香 (2016) ⁽⁸⁾ は「日本人八路軍」を八路軍、新四軍や解放軍に参加した日本人としている。本稿では、抗日戦争期にすべての中国軍に入隊して日本の侵略に立ち向かう日本人を「日本人八路軍」と定義する。

二、丁玲の戯曲『河内一郎』をめぐる

(一)『河内一郎』について

『河内一郎』は丁玲によって書かれ、1938年7月に西北戦地服務団叢書の一つとして生活書店から出版された三幕劇である。同年、『河内一郎』(後書き)は『戦地』第1巻第8号に発表された。この台本の上演について、丁玲は「私と戯劇」(1982)で、「この劇は西北戦地服務団で上演されたことがないが、台本が国

(5) 金安利. 大后方抗戦文学中的日本女性形象. 区域文化与文学研究集刊, 2019年02期。

(6) 中国語では「日本八路」と言う。

(7) 通常は共産党軍を指すが、共産党軍と国民党軍を含むすべての中国軍を指す場合もある。

(8) 張煥香. “日本八路”的中国体験与写作. 北京師範大学, 2016。

統区に伝わった後、いくつかのところから上演されたという手紙が届いた」⁽⁹⁾と書いた。

劇には主人公・河内一郎と吉岡、清水、山本などの日本兵、河内一家、中国の民間人、負傷兵、看護師、共産党幹部など、30人以上の人物が登場する。

構成とあらすじは次のようになる。第一幕の舞台は1937年7月6日、東京郊外に住むある普通の家。河内一郎は三年間の兵役を終えて家に着いたばかりに、召集令状を受けて中国へ向かった。第二幕の舞台は1938年2月、中国晋北のある日本軍に占領された村。日本軍の残虐な暴行を目にして、ホームシックを抱えている河内は戦争が嫌いになった。その夜、ゲリラが攻めてきて、河内は捕虜になった。第三幕の舞台は1938年5月のある臨時陸軍病院。河内は友好的な扱いを受け、感化されて日本帝国主義を倒すために戦うこととなった。

次に、河内一郎のイメージ分析を行う。

(二) 河内一郎のイメージ

1. 戦争に苦しんでいた民衆の一員

戦争は中国人だけではなく、日本の一般民衆にも多くの苦難をもたらした。河内一郎はその一人として、台本では主に家族の視点から戦争による打撃を描いている。

河内一郎は二十五、六の青年で、田舎に住むごく普通の家族の一員である。彼は愛し合う家族を持ち、家族には優しく進歩的な父と、気配り上手でしっかりしている妻、元気で可愛い妹と三歳の息子がいる。家族における唯一の青年男性として、彼は一家の大黒柱であった。

河内一家は平和を愛し、侵略に反対する。例えば、河内の父は他国を侵略することは何の得もなく、「寡婦や孤児を多く生み出す」⁽¹⁰⁾ だけだと考えている。

しかし、三年前に河内は徴兵された。家の大黒柱を失い、家計が厳しくなり、家族が人の顔色を伺って生きていた。そして、兵役は長い別れをもたらした。河内は息子が生まれて三年も会ったことなく、息子の成長過程を見守ることができ

(9) 丁玲, 丁玲戲劇集, 中国戲劇出版社, 1983, 第1版, p.5. 原文では「這個劇在西戰団沒有上演, 劇本流傳到國統區, 有幾個地方曾來信說演出過。」という。本稿における日本語訳はすべて筆者によるものである。

(10) 丁玲, 丁玲戲劇集, 中国戲劇出版社, 1983, 第1版, p.37. 原文では「戦争! 老遠跑去打别人, 对自己有什么好处? 多造一群寡婦孤兒!」という。

なかった。

このような状況のなか、ようやく故郷に帰った河内は家族と平凡な生活を送りたいと願っていた。しかし侵華戦争の始まりによって、彼はもう一度家族と離れ離れにならざるを得なくなった。中国に行った後、彼は戦場で故郷と家族への思いを馳せた。第二幕では、「彼らは死んだとしても、自分の国で死んだのだ。僕らはどうなるの？ 清水？ 春が来た。桜はもうすぐ咲く。僕の故郷には、小さな川がある。(略) 帰りたい……あ！ 帰りたい、帰りたい、父、家族……彼らが僕を思っているんだ……」⁽¹¹⁾という胸にじんとする告白がある。家族のもとへ帰りたいという思いが、戦地で大きな心の支えであった。

2. トルストイの愛読者である河内

河内は読書が好きで、トルストイを「本当に偉大な人」⁽¹²⁾と考えている。トルストイは人道主義と戦争反対・非暴力を提唱し、戦争による人々の受難に深い同情を寄せていた。トルストイを愛読する河内は、その反戦平和主義の影響を受けたと言える。

中国に赴く前、河内は軍閥に「日本が戦争を始めたのは、中国を白人に亡国されるという運命から解放するためだ」と騙された。しかし、戦場で目にしたのは、日本軍による中国民間人への略奪、性暴力と虐殺であった。彼は深刻な心の葛藤と苦痛に陥り、その葛藤は2つの面に表れる。

第一に、中国の民衆に同情と憎みという矛盾な態度を取っている。彼は思いやりがあり、中国人の苦痛を想察することができる。日本兵たちがある中国の老人を罵ったり殴ったりした時、河内は「彼には息子がいるのかな」「戦争で彼も息子を失った」⁽¹³⁾と言い、中国の老人から自分の父親と息子を見た。自分の父親から息子を奪い、自分を息子から奪ったと同じように、戦争は目の前の中国老人からも息子を奪った。

(11) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, p.53. 原文では「他們就是死, 也是死在他們自己的国土上, 而我們呢, 清水? 春天已經來了, 櫻花要開了. 在我的家鄉, 有一條小小的河流, (略) 我要回去……啊! 我要回去, 我要回去, 我父親, 我的家……他們望着我啦……」という。

(12) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, p.38. 原文では「那個托爾斯泰, 這是一個俄國作家, 真是偉大的人呵!」という。

(13) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, pp.46-47. 原文では「你說他有没有兒子?」「戦争也使他失去了兒子。」という。

しかし、日本軍の暴行に不満を持っていても、彼は暴行を止める勇気がなかった。例えば、他の日本兵が中国人女性に対する性暴力について語る時、河内はその残酷な話を聞く勇気さえなく、「もう言うな」⁽¹⁴⁾と言って現実から逃げようとした。その弱さによって、彼は「僕は彼(老人)を憎んでいる。彼のせいで僕は故郷から離れたから」⁽¹⁵⁾と言った。これは戦争の責任を罪のない中国人に負わせることを通して、少しでも自分を楽にさせようとしていると思われる。

第二に、日本軍の暴行を嫌いながら、自分も中国人に軽いながらも暴力を振るった。第二幕で、中国人女性を強姦した後に泣きながら「あの女は俺を見ていた。羊のようだった」⁽¹⁶⁾と言って良心の呵責を感じた隊長がいる。河内はこの隊長と似ており、自分が悪いと知りながらも、怨みを中国の民衆にぶつけた。老人が二度目に来て、お酒で娘を救出しようとした時、彼は酒をひったくり、柴の枝を投げて老人を打った。

要するに、河内は精神的苦痛に陥り、厭戦気分を持つようになった。

3. ナショナリストからインターナショナリストへ

天皇に忠誠を尽くす日本兵から反戦者となるという河内一郎の変化についてはすでに指摘された。ここでは心理的变化のプロセスをまとめながら、愛国心という視点から補足していく。

河内はあくまで「愛国者」である。捕虜になる前、彼はナショナリストとしての「愛国者」で、「捕虜になるぐらいなら死んだ方がマシだ」と考えた。しかし、捕虜になった後、彼の考え方が大きく転向した。まず、中国軍の寛大で友好的な捕虜の取り扱い方が彼の心を動かし、過去の所業を悔い改めた。そして、中国軍隊内で生活する間に、中国軍の和やかな雰囲気と中国人の勤勉さを見て、偏見が一切消えた。その上、日本帝国主義こそが中国人民と日本人民共通の敵であるという庶民の立場からの反戦の理を理解した。

以上の心理的变化を経て、河内は反戦事業に取り込むことを決意した。しか

(14) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, p.49. 原文では「不准你再說了!」という。

(15) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, p.47. 原文では「但是我恨他, 因為他使我離開了家鄉。」という。

(16) 丁玲. 丁玲戯劇集. 中国戯劇出版社, 1983, 第1版, p.51. 原文では「那女人望着我, 象一只綿羊。」という。

し、日本軍に背くことは、日本に背くことを意味しない。最初に、彼は「なんといっても僕は日本を愛している。中国人の味方として日本に反対するべきではなかった」⁽¹⁷⁾ と思っていた。覚醒した後、彼は「今も日本を愛している。でも日本を愛するにはまず日本人民を圧迫する軍閥を打倒しなければならない。僕は今正に日本のために、平和な日本のために戦っているのだ」⁽¹⁸⁾ と考えている。

つまり、河内の日本への愛は、ナショナリスティックな愛国心からインターナショナルな愛国心となった。対象の面では、天皇への愚かな忠誠から日本国民と国家への愛と転換した。方式の面では、日本軍兵士として中国を侵略することから、「日本人八路军」として日本の侵略に反撃することとなった。

(三) 河内一郎のイメージの形成要因

河内から、日本の一般庶民の苦難、日本軍の残虐行為、中国軍の寛大で賢明な捕虜政策などが見られる。このような政治性の強い人物像の形成は創作の背景と密接に関わっている。

抗日戦争勃発後、宣伝を行う最も有力な道具の一つとして、抗戦話劇は空前の普及と繁栄を遂げた。共産党員の丁玲が主任を担当する西北戦地服務団はその一つである。丁玲が作成した「西北戦地服務団行動綱領」には、「敵軍及び捕虜に対して、あらゆる方法で宣伝と訓練を行い、敵軍を瓦解させ、敵軍の将兵を味方に取り込む」演劇、音楽、講演、標語、漫画、スローガンなど、あらゆる方法で抗日戦士及び大衆に大規模な宣伝を行う」⁽¹⁹⁾ が書いてあった。

後書きで、丁玲は「この台本を書き始めたのも、西北戦地服務団の同志の包囲と催促だった。当時、台本不足が実情で、それに我らは西安に行く予定で、西安に着いた後はちゃんとした台本が必要なので、書き始めた」⁽²⁰⁾ と述べた。

(17) 丁玲. 丁玲戲劇集. 中国戲劇出版社, 1983, 第1版, p.70. 原文では「無論如何我愛日本, 我不應幫助中国人反對日本呀!」という。

(18) 丁玲. 丁玲戲劇集. 中国戲劇出版社, 1983, 第1版, p.70. 原文では「我還是愛日本。愛日本首先得打倒騎在日本人民頭上的軍閥, 我現在正是為日本而戰, 為和平的日本而戰。」という。

(19) 丁玲. 丁玲文集 第4卷. 湖南人民出版社, 1983, 第1版, p.46. 原文では「向敵軍及俘虜做各種方式之宣傳与訓練, 瓦解敵軍, 争取敵軍。」「以戲劇、音樂、講演、標語、漫画、口号各種方式向抗日戦士及群衆做大規模之宣傳(略)」という。

(20) 張炯主編, 蔣祖林, 王中忱副主編. 丁玲全集 第9集. 河北人民出版社, 2001, 第1版, pp.30-31. 原文では「開始寫這劇本時, 也是戰地服務団同志的包圍和催促。那時缺乏劇本是實情, 我們又準備到西安去, 到西安後總要一個像樣点的劇本, 于是我就着手寫。」という。

このような宣伝需要の下で、劇曲で感化された「日本人八路軍」像を作り上げたのは理解できる。河内一郎のストーリーを通して、寛大な捕虜政策と中国軍の先進性を宣伝し、より多くの日本兵を味方に取り込み、中国人の自国軍に対する誇りを強めることができる。そして、楊文(1940)の言う「真の敵である日本ファシズムに対する認識を明らかにし、捕虜の意義を強調する」⁽²¹⁾という役割もある。当時の観客・読者の代弁者として、捕虜優遇政策を理解できない中国負傷兵たちが登場し、優遇政策に対して文句を言った。他の人物が彼らを分からせることによって、観客・読者の疑念を解消できた。

そして、丁玲の個人的な経歴も河内の人物像に影響を与えた。前述したように、河内はトルストイの愛読者である。回想録などで、丁玲は何回もトルストイの読書体験について言及した。『河内一郎』では、トルストイの反戦思想と人道主義の影響は戦争に奪われた幸せな生活や、河内の戦場での葛藤などの描写から見られる。

また、日本留学帰国者と「日本人八路軍」本人の協力も関係している。本稿で分析した三作の中で、日本の風景や家庭生活、そして「日本人八路軍」の心理について、丁玲の描写は一番繊細である。第一幕の台本を仕上げた後、丁玲はそれを八路軍総政治部敵軍工作部の数名の同志に見せ、日本の風習などを教えてもらった。そして、特に澤村利勝のアドバイスと励ましを得た⁽²²⁾。1938年の単行本『河内一郎』の最後には、澤村の『被召集時的回憶』が付いてある。その文章で、召集令状を受けた反応、家族への思い、戦争への恨みなどの面から河内のイメージが伺える。

一言でいえば、河内一郎のイメージの形成は時代背景と創作目的、丁玲の読書経験、留日帰国者と「日本人八路軍」本人の協力に関わっている。

三、老舎の戯曲『大地龍蛇』をめぐって

前章において、『河内一郎』における河内の人物像とその形成要因について論じ

(21) 楊文, 「河内一郎」(丁玲女士作生活書店出版). 中央日報(重慶), 1940-3-1, 第2版. 原文では「(略)且闡明对于我們真正的敵人——日本法西斯蒂的認識, 和強調俘虜的意義。」という。

(22) 張炯主編, 蔣祖林, 王中忱副主編. 丁玲全集 第9集. 河北人民出版社, 2001, 第1版, p.31.

た。以下、『大地龍蛇』をめぐる分析を行う。

(一)『大地龍蛇』について

『大地龍蛇』は1941年に重慶国民図書出版社によって出版された三幕劇⁽²³⁾である。『文芸雑誌』創刊号—第2期に掲載され、そして1982年に『老舍戯劇全集（第一巻）』に収録されたが、残念なことに、劇は一度も上演されていなかった⁽²⁴⁾。

この劇の第一幕と第二幕が「第一節」と「第二節」から成っており、最後の第三幕に節がない。話は趙家一家を中心に展開している。第一幕第一節と第二幕第一節は1941年の趙家一家が平和になるために反撃しなければならないという共通認識に辿り着く話。第一幕第二節は中華民族の人々とアジア各国からの反戦者が共に日本軍に抵抗する場面。第二幕第二節は侵略に抵抗し、平和を取り戻すというプロセスを表す舞踊。第三幕は1961年に各国、各民族の人々が青島で「和平節」の準備をしている風景。

台本には17人の人物が登場する。その中で、中国人は14人（華僑を含む）、外国からの反戦者は3人（日本人、インド人、朝鮮人）。本稿で取り上げる「馬志遠」は重点的に描かれた外国からの反戦者の一人である。第一幕第二節と第三幕で、彼のことはそれぞれ「日本人兵士。中国軍に降伏した。馬の管理、世話をしている。——捕虜ではない」⁽²⁵⁾「中国に帰化した。青島で商売をしている」⁽²⁶⁾と紹介されている。

(二)「馬志遠」のイメージ

1. 正義を求める「馬志遠」

馬志遠は自ら日本軍閥の本質を理解することができ、平和を追求する日本兵であるという点は指摘された。ここではセリフの角度から補足する。

中国軍に帰順した過程について、馬志遠は気持ちの籠った告白をした。その告白の中で、「正義」という言葉が3回も出てきた。渡辺武秀（2010）は、「正義」は

(23) 原文では「三幕話劇歌舞混合劇」という。

(24) 老舍。老舍自伝。江蘇文芸出版社、1995、第1版、p.166。

(25) 胡絮青、王行之編。老舍劇作全集（第一巻）。中国戯劇出版社、1982、第1版、p.322。原文では「馬志遠——日本兵、投降華軍、看管馬匹——不是俘虜。」という。

(26) 胡絮青、王行之編。老舍劇作全集（第一巻）。中国戯劇出版社、1982、第1版、p.353。原文では「馬志遠——已入華籍、在青經商。」という。

国家、地域、民族を越えたところあるもので、人々を動かすという。人が「抗戦」を行うのは、自分の側に「正義」があると信じているからであると指摘した。⁽²⁷⁾

この強い正義感に駆られ、馬志遠は幾多の危険を冒し、中国軍に身を投じた。中国軍に入った後、彼は熱心に反戦工作に従事し、軍馬の管理人を担当している。「可愛い戦馬」⁽²⁸⁾という呼び方や、戦いが終わった後に「また（主を失った馬を引きに）行く」⁽²⁹⁾と繰り返して言うことから、彼の仕事に対する情熱が感じられる。

そして、未来について、彼は「戦争がなくなり、平和だけが存在する」、各民族の人々が「天真爛漫な子供みたいに、一緒にお酒を飲みながら歓談する」⁽³⁰⁾という甘い展望を持っている。平和を求める思いは評価に値するが、その理想には幼稚な一面もある。

2. 「捕虜ではない」異邦人

登場人物の紹介で、老舎は馬志遠を特に「捕虜ではない」と強調した。

戦時中に自ら中国軍に帰順し、戦後に中国に帰化した馬志遠は、中華の一員として配慮を受けていた。戦時中、各民族の反戦者に対等な同志と見なされ、そして戦後、日本に地震があった時に各民族の友人から多くの慰問を受けた。

しかし、馬志遠はあくまでも異邦人である。日本人という身分のため、彼は「日本鬼」や「捕虜」と呼ばれたり、門前払いを食わされたりしたことがあった。

また、戦後に中国の国籍を取得しても、馬志遠は故郷を忘れたことはない。第三幕では、まちづくりが活況を呈していたところ、日本に地震があったというニュースが入ってきた。馬志遠は故郷の状況に非常に関心を寄せ、彼のセリフは多くないが、「故郷」という言葉が六回も出てきた。

要するに、「捕虜ではない」馬志遠は中華に認同感を持ち、各民族の反戦同士から親切な扱いを受けた。日本人として、彼は自分の故郷を愛し、同時に自分の民族によって偏見を受けた。

(27) 渡辺武秀、老舎『大地龍蛇』試論。八戸工業大学異分野融合科学研究所紀要、2010年、第8巻。

(28) 胡契青、王行之編、老舎劇作全集（第一巻）、中国戯劇出版社、1982、第1版、p.329。原文では「可愛的戦馬」という。

(29) 胡契青、王行之編、老舎劇作全集（第一巻）、中国戯劇出版社、1982、第1版、p.329。原文では「我再去、我再去」という。

(30) 胡契青、王行之編、老舎劇作全集（第一巻）、中国戯劇出版社、1982、第1版、p.330。原文では「没有戦争、只有友好、那时候咱们才会像天真的小儿，在一块儿饮酒欢笑！」という。

(三)「馬志遠」のイメージの形成要因

馬志遠は自ら中国軍に帰順し、勇敢で熱心な「日本人八路軍」である。

丁玲が『河内一郎』を書いたきっかけと同じように、老舎も抗日文芸団体の依頼を受けて『大地龍蛇』を作った。しかし、背景と目的上では違うところがある。

まず、背景について。1940年、日本は武力による南進を始めた。このような背景の下で、各国が団結して日本に抵抗しなければならない。そのため、馬志遠を外国から来た反戦者の一人にしたのは考えられる。

次に、目的について。『大地龍蛇』は老舎が1941年に東方文化協会の依頼を受けて「東方文化」をテーマに創作した台本である。1939年、日本の文化侵略政策に対応するため、元の東方文化研究会は東方文化協会に改組し、「東方諸民族の繋がりの強化、東方文化の研究・発揚・保護、帝国主義者の侵略への抵抗、正義と平和の維持」を目的としている。『大地龍蛇』では「自らの抗戦」「各民族と力を合わせる抗戦」と「将来の平和な暮らし」という3つの光景を見せている。この構成は正に前述の宣伝ニーズに応じている。

東方文化協会の依頼以外、老舎本人も「抗戦」という題材を通して「文化」を検討することを望んでいる。関紀新(1998)によると、「老舎は完全にこのテーマへの偏愛によって、とうとう苦勞して台本を書き終えた」⁽³¹⁾という。『大地龍蛇(序)』で、老舎は「抗戦の中で、我々は固有文化の力を認識できたが、我々の欠点も見えた」⁽³²⁾と書いている。つまり、中華文化の欠如に気づき、そして『大地龍蛇』で自分の理想的な文化像を描こうと試みた。吳小美と馮欣(2006)は、その理想的な文化像は世界性を帯びていると指摘した。抗日戦争期に、この文化像は東アジアの各民族が団結して日本軍と戦い、平和を取り戻し、幸せな生活を再建することと表現される。

上述の違いによって、同じ元日本軍兵士の「日本人八路軍」であっても、河内と馬志遠のイメージは大きく異なっている。

まず、河内は捕虜になった後感化教育を受けて中国軍に入った。それに対して、馬志遠は自ら日本軍閥の本質を認識し、反戦事業に身を投じた。日本兵の自

(31) 関紀新. 老舎評伝. 重慶出版社, 1998, 第1版, p.334. 原文では「全仗着老舎太偏愛於這個題目, 他到底還是將這個戲吃力地寫了出來。」という。

(32) 胡絮青, 王行之編. 老舎劇作全集(第一卷). 中国戲劇出版社, 1982, 第1版, p.301. 原文では「在抗戰中, 我們認識了固有文化的力量, 可也看見了我們的欠缺」という。

らの覚醒を通して、アジア各民族が手を取り合って日本に対抗することの正義性がいっそう強調された。

そして、中国軍に入隊した後、馬志遠は河内のように兵士になったのではなく、馬の世話という後方勤務をしていた。『大地龍蛇』では、反戦者たちが自分に適する仕事をしている。例えば、インド人の竺可救は医者、モンゴル族の巴顔図は兵士、馬が好きな馬志遠は馬の管理人である。老舎にとって、それは各民族が団結して抗戦する理想的な方式であろう。

また、結末について、河内の結末は明言されていないが、彼の家族思いから、戦争が終わったら必ず日本に帰ることが予想できる。一方、馬志遠は中国で嘗ての戦友たちと平和な日々を送っている。それは正に老舎が憧れる世界人民大調和の風景と言えよう。

四、謝冰瑩の中編『梅子姑娘』をめぐって

(一) 二人の反戦日本人

1941年6月、謝冰瑩の抗戦小説集『梅子姑娘』が出版され、当時は大騒ぎになった⁽³³⁾。中篇小説『梅子姑娘』はその一編として収録されている。同年、冷波によって五幕劇に脚本化され、第三幕までは『黄河』の第2巻第9号—第12号に発表された。1941年10月11日の『前線日報』によると、三幕劇『梅子姑娘』は10月10日に戦区政工大隊により上演され、好評を得た。

小説に登場する「日本人八路軍」の人物は慰安婦の梅子と空軍パイロットの中條知義という二人がいる。他に、梅子の元彼の藤田、慰安婦の絹枝子と美田子、日本兵の松本と横瀬などの人物が登場する。

あらすじは次の通りである。中国侵略日本軍に入隊した恋人の藤田を追うために日本軍慰安婦となった主人公・梅子は、中国人への同情と日本軍閥への嫌悪が段々深まり、二人の反戦感情を抱く日本兵・松本と中條知義と知り合った。梅子は中條と恋人となり、中国軍が攻めてきた夜に共に日本軍から逃れ、中国軍に身を寄せた。最後に二人は中国で結婚し生活していくと決めた。

(33) 齊辯、一年來の西安文藝，黄河（西安），第2巻第10期。原文では「轟動一時的，当推冰瑩先生的『梅子姑娘』，但是幾月以来，現在想再買一本已買不到了，這正表示西北青年對於文藝書籍的需要是多么迫切！」という。

以下、まず主人公・梅子のイメージを分析し、そして中條のイメージを分析していく。

(二) 梅子のイメージ

1. 苦痛に満ちた少女生活

丁玲が家庭という視点から日本一般民衆の苦難を描くことに対して、謝冰瑩は個人という視点に着目した。

日本にいる時、梅子が幾多の苦難に耐えてきた。小さい時に父は徴兵され、中国で死んだ。母はひどい肺病でこの世を去った。梅子自身がつらい流産を経験し、ようやく恋人の藤田と結婚できた時、藤田は中国で戦死した。その中で、梅子の流産が特に詳しく描かれ、「痛」という言葉が13回も出てきた。その痛みには、子宮口に金槌をぶら下げる痛みなどの生理的な痛みと、恐怖や孤独などの心理的な痛みが含まれている。梅子にとって、子供はもはや「かわいい天使」ではなく、胎児が腹の中に動いていることは「無数の毒蛇が自分の肉を争って食べている」⁽³⁴⁾ ようであった。

2. 慰安婦から反戦女子へ

中国侵略日本軍に入隊した恋人を追うために、梅子は志願に日本軍慰安婦となり、日本軍国主義から二重の被害を受けた。まず、精神的な面について、王学振(2012)は梅子が慰安婦となったのは軍閥に騙されたからであると指摘した。そして、生理的な面では、従軍慰安婦として獣のような日本兵に犯され、体の苦痛を受けた。それに加え、自分を犯した日本兵から日本軍の無残な行為を聞いて、梅子は日本を徹底的に恨むようになった。

梅子の優しさ、思いやりと戦争に対する考えについては、金(2019)論に譲る。ここでは梅子の反戦行動の変化をまとめた。

最初、梅子は日本に対する恨みと中国への同情を持っているが、建設的な考えはまだなく、「もう生きたくない」⁽³⁵⁾ のようなやけくそな言葉まで口に出した。そ

(34) 謝冰瑩. 梅子姑娘. 新中国文化出版社, 1941, 第1版, p.110. 原文では「像有無數的毒蛇在爭吃着自己的肉那么劇痛。」という。

(35) 謝冰瑩. 梅子姑娘. 新中国文化出版社, 1941, 第1版, p.115. 原文では「我早就不想活了」という。

の後、厭戦気分を持つ日本兵たちとの交流につれ、梅子は積極的に他人の反戦思想を覚醒させるようになり、中国軍に身を投ずる計画を持つようになった。しかし、この段階では、慰安婦という身分の制約によって、他人の助力なしには実際の反戦行動ができない。最後、中條と共に日本軍から逃れ、中国軍に入隊した後、梅子は有名な反戦女子となり、活発に反戦活動に参加できるようになった。

総じて言えば、梅子は自ら日本軍国主義の本質を見抜き、平和を追求する反戦女性である。彼女の覚悟は、小説に出てくる反戦日本人男性よりも強い。男性の反戦活動については次の節で論じたい。

(三) 中條知義のイメージ

1. 理想主義者の空軍パイロット

中條は爆撃機を操縦する空軍パイロットである。彼は志願して戦争に参加したわけではなく、鳥のように自由に空を飛べたい、世界中を旅したいと思ってパイロットとなった。

しかし、戦争によって、彼のロマンチックな理想は打ち碎かれた。爆撃の任務を課せられた中條は加害者の立場に立たせられた。それでもなお、感性で善良な中條は人殺しにはならず、中国の民間人を傷害しないために銃口を空高く向け、「空に浮かぶ雲を掃射しただけ」⁽³⁶⁾ だった。

2. 行動力の足らぬ反戦者

前述したように、中條は侵略行為に不満を持ち、中国人を傷害することを避けている。しかし、それはあくまでも消極的な抵抗である。彼は保守的な人で、面子を失うことや中国兵に恨まれ殺されることを恐れるため、彼は立ち上がって日本軍閥に抵抗する勇気がなかった。

彼の重大な変化はほとんど外部からの推進によって起こった。テキストには三つの事例が見られる。まず、梅子の説得によって、「中国軍が必ず捕虜を殺してしまう」という考えを捨て、中国の軍隊は真の平和を追求する部隊であると信じるようになった。そして、重慶を爆撃する任務が命じられた時に、病氣と称して

(36) 謝氷瑩、梅子姑娘。新中国文化出版社、1941、第1版、p.123。原文では「只掃射了天上一些雲彩」という。

空中爆撃に参加しなかったのは梅子の提案に従ったためである。また、自分の反戦行働は疑われ、梅子との会話は盗み聞かれたので、中国軍に帰順するというやむをえない選択をした。梅子と比べて、中條は優柔不断であると言えよう。

(四) 梅子と中條のイメージの形成要因

謝氷瑩は『梅子姑娘』で梅子と中條という二人の反戦日本人カップルを作った。梅子はその名の通り、梅の花と同じように精神的に強く、日本軍国主義に抵抗する勇氣と革命に対して熱い情熱を持っている。中條知義も名の通り、大義名分を明らかにしている。しかし、優柔不断なところもある。

前の二作と同じ、『梅子姑娘』も抗日宣伝の必要に応じて作られたものである。当時、謝氷瑩は文芸月刊誌『黄河』の編集主任を務めていた。『黄河』は国統区の刊行物で、「倭寇を肅清し、民族を復興する」を創刊の主旨とする。謝氷瑩は『黄河』で小説集の『梅子姑娘』を宣伝し、冷波に脚本化された劇曲『梅子姑娘』も『黄河』に発表した。

一方、前の二作と比べて、『梅子姑娘』における「日本人八路軍」像には2つの特徴が見られる。

第一に、日本への愛着を徹底的に捨てたこと。河内と馬志遠が日本を愛しているとは違い、中條と梅子は「私たちは将来中国で結婚しよう」「もう日本には帰らないでおう」⁽³⁷⁾と言った。

その理由は、人物の経歴と作家自身の経歴にあると思われる。まず、人物の経歴から見ると、河内は幸せな家族があるとは異なり、梅子は日本ではほぼ苦しみしか持っていなく、親しい家族もほぼ亡くなり、故郷への未練が一切なかった。そして、作家自身の経歴から見ると、金安利 (2019) は謝氷瑩の二度日本に留学した経歴が反戦日本人についての創作を促したと指摘した。最初の留学の時、謝氷瑩は中国人留学生の間に「抗日救国会」を組織したため、日本当局に強制送還された。そして二度目の日本留学に行った時、偽満州国を支持しなかったため、軍国主義者に投獄され、三週間の非人間的な拷問を受けた。この経験は謝氷瑩に軍国主義化した日本を完全に絶望させたと考えられる。したがって、作家の筆に

(37) 謝氷瑩. 梅子姑娘. 新中国文化出版社, 1941, 第1版, p.130. 原文では「我們将来就在中国結婚吧!」「我們永遠不要回日本了吧!」という。

よる「日本人八路軍」が徹底的に日本に背を向けたのは不思議ではない。

第二に、女性が主人公であること。金安利 (2019) が指摘したように、反戦運動に身を投じる日本女性の姿は抗戦文学の中で非常に珍しい。慰安婦を主人公にしたのは、正に謝氷瑩の女性に対する関心からである。

「女兵作家」として知られている謝氷瑩は作品の中で常に女性の解放を民族の解放と結びつき、女性の社会での活躍を呼びかける。『黄河』に載せる文章を選ぶ時も女性を重視し、「婦女の運命に関する文章なら何でも選んで載せる」と述べた⁽³⁸⁾。

梅子には謝氷瑩のフェミニズム思想が鮮明に現れている。まず、普通のイメージでは柔弱な女性が男性よりも強い反戦思想を示している。そして、小説集を出版する際、収録された短編や中編の主人公が主に女性であるため、小説集を『梅子姑娘』と命名した⁽³⁹⁾。

「女性の解放を民族の解放と結びつく」という考えから、謝氷瑩は「さまざまな女性を(抗日の事業に)多く取り組ませるべきだ」⁽⁴⁰⁾と主張した。その中で、慰安婦は特に注目を受けた。1939年7月27日、謝氷瑩は第三回文芸座談会を主宰し、臧克家、姚雪垠、世勤などの文芸社のメンバーと、中国軍人と六名の日本捕虜と共に、慰安婦と日本女性の前線での勤務状況と障害について討論し、『梅子姑娘』を創作するインスピレーションを与えられたと推測される⁽⁴¹⁾。

要するに、『梅子姑娘』における「日本人八路軍」像の形成は政治宣伝の需要、謝氷瑩の経歴とフェミニズム思想に関わっている。

五、終わりに

本稿は『河内一郎』、『大地龍蛇』と『梅子姑娘』における各「日本人八路軍」像を分析し、各章の最後の節で人物像の共通点と相違点を整理し、イメージ形成に影響を与える要因を探った。

(38) 謝氷瑩。黄河信箱。黄河(西安)，第1巻第8期。原文では「只要有關於婦運的文章我們是無不選登的。」という。

(39) 謝氷瑩。梅子姑娘。新中国文化出版社，1941，第1版，p.4。

(40) 謝氷瑩。梅子姑娘。新中国文化出版社，1941，第1版，p.3。原文では「我們應該大量吸收各種婦女來參加，只要她是抗日的」という。

(41) 朱曉蓮。「女兵作家」謝氷瑩研究。東華理工大学，2019。

抗日戦争期に、作家たちは「日本人八路軍」像を作り上げたことで、中国現代文学を豊かにした。当時の「日本人八路軍」像は性別から見れば、男性もいれば女性もいる。ルートから見れば、感化教育を受けて捕虜から反戦者となる者もいれば、自ら帰順した者もいる。日本軍内の職務から見れば、陸軍、空軍、従軍慰安婦がいる。中国軍内の職務から見れば、兵士、後方勤務者がいる。「日本人八路軍」という日本人像はイデオロギー的な要素と密接に関わり、時代の需要に応じて生まれたものと言えるが、完全に政治宣伝のために作ったのではない。例えば、老舍の文化理想や謝冰瑩のフェミニズム思想が人物像に含まれている。

無論、当時の時代背景において、人物像には不自然なところがある。例えば、梅子は中国人と接触することもなく、中国人は真の平和を追求し、日本人捕虜を暴力的に扱うことはしないと疑いなく信じていた。これは作者が想像した理想的な反戦日本人像と言っても過言ではない。

その不足はテキストの政治性と関係がある。例えば、丁玲は「我与戲劇」(1982)で「本当のことを言えば、この二つの台本は、私が生活の中で何かのインスピレーションを得て書いたのではなく、じっくりと構想して作り上げたのではなく、ただ宣伝の需要に応じて、演劇組に与えられた任務を果たすだけだった」⁽⁴²⁾と書いた。それにしても、抗日戦争期の中国文学における「日本人八路軍」像は評価すべきであろう。

もちろん、「日本人八路軍」像を徹底的に研究するには、本稿で述べたことだけではまだ不十分である。本稿は中国作家の作品に焦点を当てたが、日本人作家の手によるものにおいて「日本人八路軍」像があるかどうか、あればどのように描かれているのかなどについて、研究の余地が残っている。また、「日本人八路軍」は抗戦期の作品にのみ登場したわけではない。時期ごとに「日本人八路軍」像を把握し、その変容の考察も研究価値があるのではないかと思う。

参考文献

- 金安利. 大后方抗战文学中的日本女性形象. 区域文化与文学研究集刊, 2019年02期.
王学振. 抗战文学中的慰安婦題材. 南京師範大学文学院学報, No.68.
丁玲. 丁玲文集 第4卷. 湖南人民出版社, 1983.

(42) 丁玲. 丁玲戲劇集. 中国戲劇出版社, 1983, 第1版, p.5. 原文では「説实在話, 這兩個劇本的写作都不是我本人在生活中有什么靈感, 也不是經過仔細醞釀、構思, 精彫細刻出来的作品, 而只是適應宣傳工作的需要, 完成戲劇組分配給我的一項写作任務。」という。

楊文,「河内一郎」(丁玲女士作生活書店出版),中央日報(重慶),1940-3-1。

張炯主編,蔣祖林,王中忱副主編,丁玲全集 第9集,河北人民出版社,2001。

老舍,老舍自伝,江蘇文芸出版社,1995。

渡辺武秀,老舍『大地龍蛇』試論,八戸工業大学異分野融合科学研究所紀要,2010年第8卷。

関紀新,老舍評伝,重慶出版社,1998。

呉小美,馮欣,老舍的文化理想与《大地龍蛇》,中国現代文学研究叢刊,2006年04期。

謝水瑩,黄河信箱,黄河(西安),第1卷第8期。